

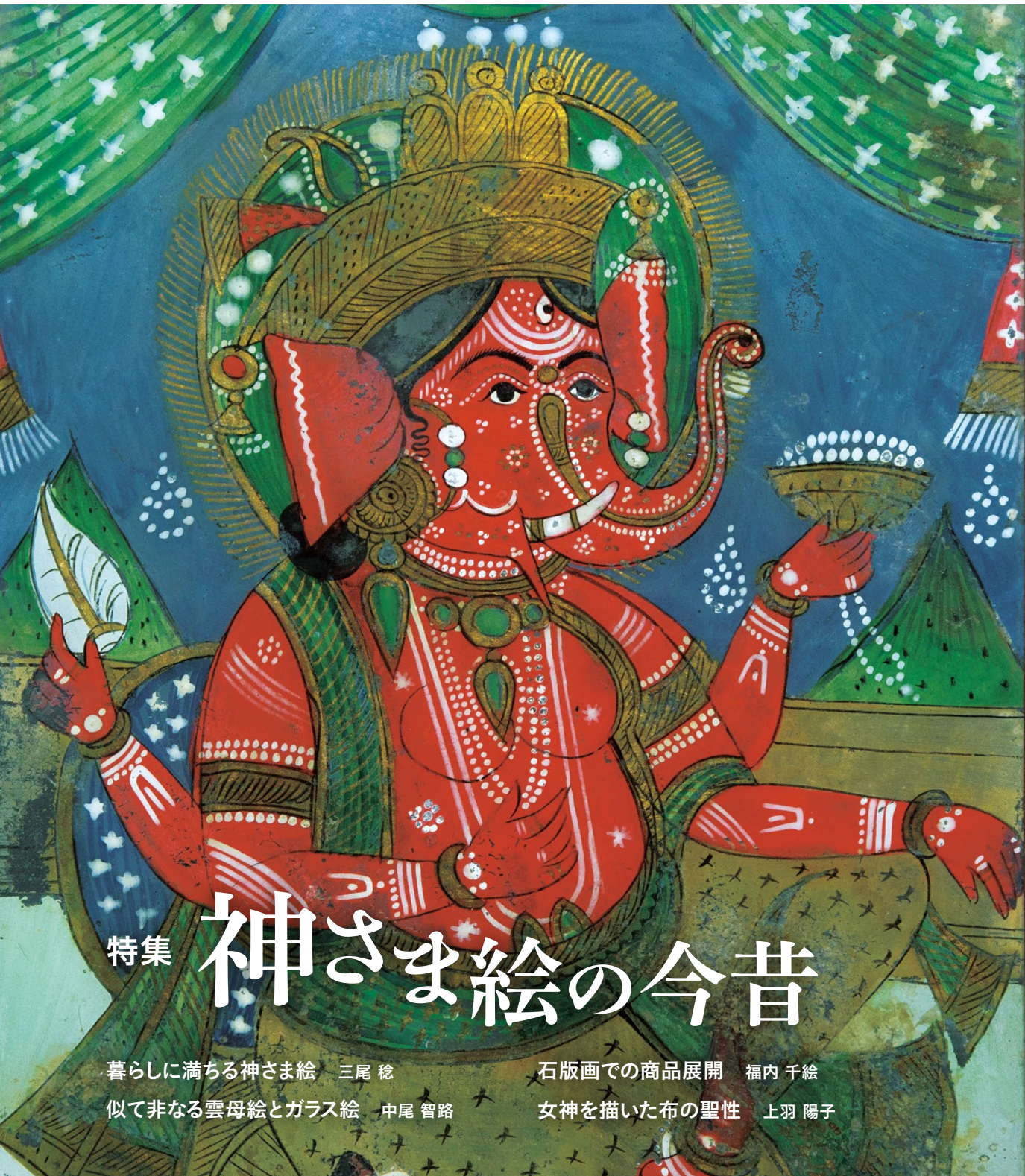
月刊 みんぱく

2023年

9月号

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283 令和5年9月1日発行 第47巻第9号通巻第552号

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology



特集

神さま絵の今昔

暮らしに満ちる神さま絵 三尾 稔

石版画での商品展開 福内 千絵

似て非なる雲母絵とガラス絵 中尾 智路

女神を描いた布の聖性 上羽 陽子



マスク考

篠内 佐斗司

能楽師が面をかけることは、神霊になりきるための聖なる行為です。またある着ぐるみの演者は、「マスクを被って目の穴から外界を見た瞬間、キャラクターが乗り移る」と話してくれました。どうやら仮面には、別の人格が憑依する働きがあるようです。

日本人は目の表情で相手の心を読み、西洋人は口の動きと言葉で相手を理解するといわれます。そして日本映画でサングラスをしているのは悪漢と相場が決まっていますが、欧米では怪傑ゾロのように目許だけを覆う仮面やサングラスはヒーローの象徴で、大統領から軍人まで強さをアピールするひとに愛用されます。一方、銀行強盗や列車強盗などの悪漢は顔の下半分を覆っています。また日本の甲冑では、顔の下半分を覆う面頬が使

われましたが、西欧の兜は目の周りを覆います。

ジム・キャリー主演の映画「マスク」（一九九四年）は、うだつの上がない銀行員が川で拾った不気味な木製のマスクを着けると、魔神のような超能力を発揮して悪人を懲らしめるというコメディですが、最後に思いを寄せる女性の愛を獲得したとたん、惜しげもなく仮面を川に捨ててしまいます。仮面芸能は、アフリカから東アジアまでの非キリスト教圏で大変盛んです。舞楽「蘭陵王」は、仮面のよい効果を顕彰したものの代表です。六世紀の北齊の高長恭は、わずか五百騎で敵の大軍を破り洛陽を包囲したほどの猛将でしたが、類い希な美貌のため味方の兵が見惚れたり、敵に侮られるのを嫌って、必ず怪異な龍の仮面を被って出陣したという故事に倣った演目です。

かつて中世のヴェネツィアでは、沈鬱なカトリック社会の憂さ晴らしに仮面を被り、その匿名性によって野放図に振る舞う仮面カーニヴァルが流行りました。またプロテスタント圏では、仮面によって変身する多神教的文化を低級なものと見做します。そして第一次世界大戦時のガスマスクの印象からか、旧ドイツ軍の鉄兜にガスマスクは、悪魔的アイコンとして定着しています。その延長でしようか、欧米では、コロナマスク着用の法的義務が解除になったとたん一気に脱マスクが進みましたが、日本で多くのひとがまだにマスク着用を続けているのは、マスクへの信仰とも言える特有の心情を反映しているのかも知れません。

さて奈良県立美術館では、今年の秋に開館五〇周年記念「仮面芸能の系譜 展の開催を予定しています。縄文以来の仮面を見ながら、日本人のマスク好きについて考えてみるのも一興かも知れません。

目次

- 1 エッセイ 千字文
マスク考
篠内 佐斗司

特集

神さま絵の今昔

- 2 暮らしに満ちる神さま絵
三尾 稔
- 4 似て非なる雲母絵とガラス絵
中尾 智路
- 6 石版画での商品展開
福内 千絵
- 8 女神を描いた布の聖性
上羽 陽子
-
- 10 みんぱく回遊
パンとチーズと。
宮前 知佐子
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 ○○してみました世界のフィールド
あの絵画は誰の手へ
張 詩梅
- 16 コレクションあれこれ
タイムカプセルを開く
—— 1980年代のオーストラリア先住民の暮らし
平野 智佳子
- 18 シネ倶楽部 M
遊牧の未来について
—— 「最後の渡り鳥たち」
松原 正毅
- 20 ことばの迷い道
うまさと同じ？ 臍物からナッツまで
工藤 さくら
- 21 編集後記・次号の予告

表紙

ガラス絵(ガネーシャ)19世紀後半～20世紀前半
(福岡アジア美術館所蔵[黒田豊コレクション])

プロフィール

彫刻家、東京藝術大学名誉教授、奈良県立美術館館長、ピューティ&ウエルネス専門職大学副学長。彫刻制作と併行して、仏像制作の古典技法の研究と保存修復に携わる。実技者が語る仏像解説には定評がある。著書に、「古典彫刻技法大全」（共著、求龍堂）、「ほとけの履歴書」（NHK出版）、「仏像風土記」（大和書房）ほか。

特集

神さま絵の今昔



民家の壁面に描かれた神像。サガスジューという地域特有の神を祀る。サガスジューは壮絶な戦闘や不慮のできごとで亡くなった戦士カーストの男性が神となった存在で、霊媒に憑依し人びとの願いをかなえる(ラージャスターン州ウダイプル市、2014年)

インドで10億人余りを擁するヒンドゥー教徒の庶民の暮らしにはさまざまな神がみの図像——神さま絵——があふれている。この特集では「神さま絵」の成り立ちや現代インドでの使われ方に迫る。

特別展 交感する神と人 ——ヒンドゥー神像の世界

会期：2023年9月14日(木)～12月5日(火)
場所：特別展示館

暮らしに満ちる 神さま絵

三尾 稔

民博教授

いたるところに姿をあらわす神像

インドの街や村を歩くとさまざまなお家で、ヒンドゥー教の神がみの像を目にする。寺院や家庭の祭壇はもちろん、路傍にも小さな祠に神像が祀られ、朝夕線香が供えられている。民家の壁面に神さまの絵が描かれていることもある。神さまのポスターを売る店も繁盛している。それだけでなく、商品のラベルやカレンダーなど、神がみの信仰とはおよそ関係がなさそうなモノにも神さまの絵は登場する。神がみにちなんだ屋号で営業する商店も多く、その看板にも神さまの絵が描かれている。

日々の暮らしに満ちあふれる神像は彫像やテラコッタ、金属の像のこともあるが、多くは顔料で描かれたり、紙に印刷されたりした絵画だ。カラフルで目立ちやすく、たいがい神がみは正面を向き、わたしたちを見つめてくる構図で描かれている。こうしたヒンドゥー教の神がみの絵をこの特集では神さま絵とよび、その成り立ちや使われ方に迫ってゆく。

より美しい姿に

現代インドで神さま絵をもっともよく目にす



婚礼のはじめの儀式でガネーシャ神に食物を食べさせているところ(ラージャスターン州ウダイプル市、2012年)

るのは家庭の祭壇である。常日ごろの礼拝用の祭壇にいろいろな神さま絵が置かれていたりすることもあるし、婚礼や祭礼のときに臨時にしつらえられる祭壇に飾ることも多い。

これらは、離れたところからただ崇めるといって存在ではない。儀礼のなかで色粉を塗り込んだりといったように、信者がじかに働きかける対象となつている。普段使いの神さま絵には油をかけることはないが、それでも絵を覆うガラス面に色粉を付ける行為などは普通におこなわれる。額装したポスターに思い思いに布やビーズで飾り付けをして、より美しい姿に改変する例もめずらしいことではない。

神さま絵への直接的な働きかけの背景には、神像は単に神の姿をかたどつたものではなく、そこに実際に神が宿るといふ考え方があつた。像は神の実際の身体になるのだから、実際にお清めをしたり、飾りを付けたり、食物を食べさせ

聖と俗を橋渡しする神さま絵

て満足してもらい、そのうえで信者の願いを聞いてもらうべきなのである。神さま絵の大半が正面を向いているのも、像に宿る神と視線を交わすことで神との交流を果たすためと考えられる。神さま絵は信者との交流のための実用的な「道具」のような役割をはたしているともいえるだろう。

こういつた像への働きかけは、伝統的には彫像や金属像など立体的なものを対象におこなわれていた。神さま絵も描かれていたが、絵師が一点物として制作する貴重品で、庶民の家庭で頻繁に使えぬものではなかった。この状況を一変させたのが西欧由来の印刷技術だった。

印刷絵画は同じ図柄の色鮮やかな神さま絵を安く大量に生産できるため、一九世紀末以降インドの家庭に急速に普及した。これに目を付けた欧米や日本の業者は商品のラベルや自社



よるず屋さんの看板。シヴァとパールヴァティー女神の絵が描かれている。シヴァは生命力、創造と破壊を司る神とされる。パールヴァティーはその配偶神だが、シヴァの力の源はパールヴァティーにあるとされる(ラージャスターン州ウダイプル市、2023年)



からし菜油の商標。神話「マハーバーラタ」の一場面が描かれている(ラージャスターン州ウダイプル市、2012年)

日用品にあらわれた神さま絵は、商品の用途が関わっても大切に保管された。神が宿りうる絵はみだりに捨てられないからである。祭壇に置かれ儀礼に用いるという転用の例は現代でも数多く見られる。こうして神さま絵は神と人をつなぐだけでなく、聖と俗のあいだをつなぎ暮らしのすみずみにまで神の姿を根づかせる重要な媒体となつたのである。

九月一四日からみんぱくで開催する特別展「交感する神と人——ヒンドゥー神像の世界」では、さまざまな神像の展示を通じて神と人の五感を通じた交流の姿を紹介する。本特集でとりあげた事例や資料も展示される。足を運んで実際にご覧いただければ幸いです。

似て非なる雲母絵とガラス絵

中尾 智路

福岡アジア美術館学芸員

背景キラキラ 前景くつきり

インドの神さま絵には、類似した透明素材を使ったふたつの神さま絵——「雲母絵」と「ガラス絵」がある。ガラスは誰もがよく知る素材だが、雲母についてはどうだろうか。雲母が何なのか、どういう特性があるのかをきちんと説明できる人は少ないかもしれない。

簡単にいえば雲母は鉱物の一種である。ケイ酸塩鉱物に属し、層状に薄く剥がれやすいこと、しかも剥がれたシート状の雲母が透明であることが大きな特徴だ。はじめて見るとびっくりするかもしれないが、ペラペラでまるでプラスチックにしか見えない。

日本では雲母のことを「きらら」や「きら」ともよぶが、江戸時代後期には細かく砕いた雲母を浮世絵の背景に用いた「雲母摺」が流行した。一方のインドでは、雲母は砕かず、薄い透明シートのまま絵の支持体にした。くしくも両者はまったく違う技法にもかかわらず、背景だけに光沢のある雲母を用いることで、前景の人物や神像をくつきり浮かび上がらせることができたのである。

ガラス越しのあざやかな色彩

シートの表面に不透明水彩で描いた雲母絵とは対照的に、ガラス絵はガラス板の裏側から描くことを最大の特徴としていた。

そうすることで絵の具の凹凸は表側から見るとまったくなくなり、あざやかな色彩の反射光がガラス越しに人びとの眼に届いたのである。またイメージの表面はつねにガラスに守られているので、絵の具の剥落や形質変化のリスクも低くなる。

しかし、実際に板ガラスの裏側から描くことはなかなか難しい。具体的に《女性楽士に囲ま



雲母絵《踊るシヴァ(ナタラージャ)》19世紀半ば
(福岡アジア美術館所蔵【黒田豊コレクション】)

れるクリシュナ》を見てみよう。修復時に撮影した裏側の写真からは、次のような順序でガラス絵が制作されたことが推測できる。①輪郭線や目や髪を黒色で描く、②陰影や細部を描く、③人肌や背景などを幅広く塗る、④金色を塗る、⑤装身具のために銅片を貼る。

つまり、通常の絵画制作のプロセスを部分的に逆にしなければならないのである。これには職人的な技能が必要とされただろう。

インドならではのガラス絵の誕生

このガラス絵はいったい誰が、何のために制作したのだろうか。その歴史をすこし紐解いてみよう。

インド人の手によってガラス絵が制作されたのは一九世紀以降である。もともと一七世紀ごろにヨーロッパで誕生し、その後中国清代の広東を中心に制作されるようになった。インドにガラス絵がもたらされたのも、おそらく中国



中国人画工が描いたガラス絵《マラーターの貴人》
19世紀半ば
(福岡アジア美術館所蔵【黒田豊コレクション】)

からで一八世紀半ばに西海岸地域に広まったという。

それゆえインドにある初期のガラス絵の多くは中国製の輸入品か、インドに住み着いた中国人画工の手によるものだった。肖像画や風景画などのイメージが、王侯貴族や東インド会社の高級社員向けに描かれたのである。しかし一九世紀半ばになり、インドに新興富裕層があらわれると、彼らのためにインド人が描いた新しいガラス絵が登場する。それがヒンドゥーの神々を描いた礼拝用のガラス絵である。

雲母絵はガラス絵の模倣？

雲母絵が盛んに制作されたのもちょうどその時代だった。現存するものの多くが一九世紀半ばに制作され、ヒンドゥー教の神々だけでなく、インドの宗教行事や風俗、動植物などのイメージが、博物誌的な関心や本国へのお土産品として植民地時代のイギリス人たちに人気を集めたのだった。

この雲母絵のルーツについては、ガラス絵を模倣したといわれることもある。しかしそう考えるには、両者はあまりにも違いすぎる。前述



雲母絵を用いた玩具《着せ替えカード》19世紀半ば
(福岡アジア美術館所蔵【黒田豊コレクション】)
透明な雲母を活かした作例。こうした異国情緒あふれるイメージが外国人向けのお土産として人気を博した



右:ガラス絵《女性楽士に囲まれるクリシュナ》
19世紀後半～20世紀前半
(福岡アジア美術館所蔵【黒田豊コレクション】)



左:ガラス絵の左下部分をクリーニングする様子。裏側からは黒目が見えない。装飾用の四角い銅片が並ぶ

石版画での商品展開

福岡 千絵

大阪芸術大学 非常勤講師

ラヴィ・ヴァルマーの勝算

色彩豊かに印刷された今日の神さま絵は、一九世紀末ごろから二〇世紀前半にかけてさかんに制作された、ヒンドゥー教の神話を画題とした石版画にその源流を辿ることができる。石版画を手がけた代表的な工房のひとつに、一八九〇年代初めに西インドの商業都市ボンベイ（現ムンバイ）で開業したラヴィ・ヴァルマー美術石版印刷所が挙げられる。ここで作られた石版画の神さま絵はどのようにして人びとのもとに行き渡ったのだろうか。

ラヴィ・ヴァルマー美術石版印刷所は、画家ラヴィ・ヴァルマー（一八四八〜一九〇六年）と彼の実弟、そして綿織物業を営む知人らの共同出資により運営された。印刷先進国のドイツから印刷機材を導入し、またドイツ人の技師たちも雇い入れての大きな事業であった。

ラヴィ・ヴァルマーは油絵の写実的な描写を得意とし、西欧の美術仕立てでヒンドゥー教の神話世界を描いたことで人びとの注目を集めていた。後に神さま絵の定番となるラクシュミーとサラスヴァティーの両女神の絵姿の起点は、こうした西洋技法と宗教伝統とを融合した作品

である。展覧会では彼の絵画作品を購入したいと望む人も多く、また作品の写真は飛ぶように売れたという。当時すでにドイツやインド国内の都市で刷られたヒンドゥー教の石版画が出回っていたものの、そうした需要により、宗教絵画の市場でのラヴィ・ヴァルマー作品の勝算は見込まれていたのだろう。

印刷所では、油絵の神話画作品を多色刷りの油絵風

石版画（オレオグラフ）へと色鮮やかに再現することに成功し、それらはラヴィ・ヴァルマーの名をしるした商品として大量に流通することになった。ラヴィ・ヴァルマーの業績を紹介する当時の雑誌記事（一九〇六年）では「ヒマラヤ山脈からコモリン岬まで文化的あるいは裕福な家庭は少なくとも一枚はラヴィ・ヴァルマーの複製画を持つており、通りで暮らす者ですらそれらを楽しむことができた」と伝えられる。

衣裳装飾が施されたラヴィ・ヴァルマーの石版画（部分、筆者蔵）



発見された卸売業者の価格リスト

こうしたラヴィ・ヴァルマーの石版画の普及に貢献したのは、トールピーワラー（帽子職人）の称号で知られたアナント・シヴァージー・デーサーイーというボンベイの事業者である。彼ははじめ帽子の仕立屋として成功し、その後事業を拡大してベルベットの布地や金属製品、そしてガラスや額縁とともに石版画の販売を扱うようになった。印刷所の開業当初からヴァルマー

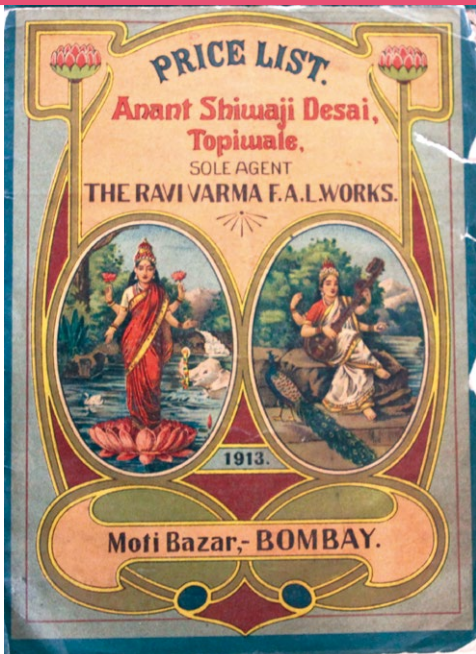
タイトルの記載があり、このリストの表紙を飾っていることから、販売店にとっても一推しの絵画であったようだ。

また、有料のオプションについても記載がある。注文に応じて金属の小片やシルクの布で石版画の画中の人物像に対して煌びやかな衣装をまとうているかのように装飾を施すというものがある。これは神像に布を掛け飾り付けをおこなうヒンドゥー教の拝礼行為と通ずる。さらに額装を取り扱っていたことも注目される。額装のガラスの表面は、神像に香を塗布して捧げる行為に適したものである。

こうして石版画の神さま絵は、印刷所と人びとをつなぐ販売店の商品展開によって、より広くより深く人びとの信仰のなかで受け入れられたといえよう。



色鮮やかに印刷された神さま絵。額装されて露店で売られている（デリー、2010年）



『価格リスト』（1913年）の表紙。ラクシュミー女神（左）とサラスヴァティー女神（右）が描かれる（福岡アジア美術館所蔵【黒田豊コレクション】）

兄弟と交友があったが、一九〇六年には印刷所と独占的な契約を結び、ラヴィ・ヴァルマーの石版画作品を取り扱う唯一の卸売業者（および版權も有する発行者）として一九二〇年代ごろまで活動した。同事業者が発行した『価格リスト』（一九一三年）は、近年に発見された貴重な資料である。卸売りの段階で小売店や得意先に向けた「売り方」を知ることができる。石版画のサイズは六段階に設定され、例えば小サイズでは一二枚セット三アンナ（二アンナは一分の二ルピー）、特大サイズでは一枚につき二ルピーで販売された。比較的高価な紳士の装いとしての英国帽の価格帯が六アンナから一ルピー四アンナまでであることを勘案すると、庶民でも手の届く安価なものから富裕層向けの高価なものまで、幅広い階層を意識した価格設定であったといえる。

その画題はおよそ八〇〇種類に上る豊富なラインナップである。叙事詩や神話、有名な巡礼地の神がみや地方神など人びとの多様な需要に応えたことがうかがえる。やはりラクシュミーとサラスヴァティーの両女神は必ず各サイズに



ガラス面に白檀香を塗布されたサラスヴァティー女神。額装は神さまに香を捧げる行為に適している（タミルナドゥ州シヴァガンガイ県、2017年）

女神を描いた布の聖性

うえば ようこ
上羽陽子

民博准教授

聖なるシャクティの力

「この女神の名前はアンベ、こっちはバフチャラー、これはメラディ」。ずらりと並べられた儀礼布に、この地域特有の女神が描かれている。インド西部グジャラート州には、マータニーパッチェーディとよばれる女神儀礼用の染色布がある。使用者は、同州のヒンドゥー女神を崇



現地でラビッドファスト染料とよばれるアイソック系染料を用いた塗り作業
(グジャラート州、アフマダーバード市、2011年)

拝する人びとで、その多くはかつて不可触民とみなされ、ヒンドゥー寺院に立ち入ることが許されていなかった。そのため、彼らは居住区に自らヒンドゥー女神の祠を建て、儀礼をおこなってきた。

その際、この儀礼布は数枚組み合わされ、祠の周りの聖なる空間と日常の空間とを仕切る役割を担っていた。また、霊媒となる司祭者がこの布をまとい、儀礼中に恍惚状態になる。儀礼では、女神が憑依し神託を告げ、供儀を求める。人びとは、女神のもつ聖なる力シャクティによって危機的状況が乗り越えられると信じており、その力にあやかろう、すがろうと群がるのである。儀礼布は、供物を置くための敷布や子宝の祈願や治癒祈願のための供物にも使用され、聖性をもつ布として扱われてきた。

女神マーターの姿は一〇〇ある

この地域では、女神マーターの姿は一〇〇あるといわれている。自らの属する集団や父系外

にもせずにポーツとしていた。聞けば、今は生理中のため、作業できないとのことだった。

ヒンドゥーの人びとのあいだでは月経中の女性は不浄だとされ、神への礼拝や寺院への参詣が禁じられている。女神儀礼用の染色布は、ローカルな人びとにとって聖性をもつため、その製作においても、生理中の女性がかかわることを禁止しているのだ。加えて、木版などの道具も触ることも禁じられている。そのため、妻や子どもの生理が重なると、働き手が減ってしまい、作業の進みが遅くなってしまふ。

じつはチッタラは、女神をモチーフとした壁掛け布やショール、Tシャツなどの商品を国内外のギャラリ、工房を訪れる国内外の観光客などに向けて製作している。

これらの商品はローカル向けの儀礼布とは異なり、宗教的機能はもっていない。しかし、面白ことに、こちらの商品づくりにおいてもチッタラは生理中の作業を禁じている。つまり、宗教的機能をはなれた商品への図像であったとしても、現地の人びとにとって女神が描かれた布は聖なる存在であり、そこには聖性が守られて製作されているのである。



宗教的機能をもたない観賞用の壁掛け布の製作
(グジャラート州、アフマダーバード市、2023年)

兼用している工房で家族総出によって製作をしている。その理由は製作工程にある。

合成染料で製作される儀礼布の工程は大きくわけると、①図像の輪郭線を捺す、②染料を塗布、③水洗の三工程からなる。染料の特徴は、一般的なスクリーン捺染に必要な蒸熱の工程がいらず、塗り絵のように布に塗布するだけにある。

まず、図像の輪郭線を男性が木版やシルクスリーンで印捺する。次の染料を塗布する作業がもっとも手間がかかる。ナツメヤシで作った筆に染料を付けて、輪郭線の合間を手作業で置いていく。布の大部分を埋めるため、作業量は多くなり、幼い子どもの手も借りて家族全員でないと、とても終わらない。

作業ができない期間

ある日、いつも作業をしている女の子が、な



女神儀礼用の染色布マータニーパッチェーディ。中央にヤギに乗ったメラディ・マーターが描かれている(グジャラート州、アフマダーバード市、2011年)

婚集団ごとに異なる女神を崇拝するため、この一〇〇は無限大の意味で、トラに乗ったアンベ・マーター、ニワトリに乗ったバフチャラー・マーター、ヤギに乗ったメラディ・マーターなど多様だ。

図像には、女神が中央に描かれている。周辺に女神寺院、その入り口に雄牛や雄山羊などの生け贄を捧げようとする司祭、象徴としての悪魔を破壊する武器、香炉、生け贄の血を入れる器、女神の神聖性をあらわす扨子や厨子などの女神の持ち物など。さらにそれを取り囲むように、他の女神、ヒンドゥーの神がみ、崇拜者、楽人、踊り子など、神話上の情景が絵語りに描かれている。女神の視線がしっかりとした表情が良い図像とされている。

家族総出の作業となるわけ

製作をしているのは、同州アフマダーバードのデーヴィーブジャックというコミュニティに属し、画家や描く人を意味するチッタラと自称している人びとである。彼らは自宅や数家族で



ヨーロッパ展示の入口に鎮座する多様なパン。パンの奥には、チーズ作りの道具が並び、パンとチーズ。日本ではさしずめ「米と味噌」といったところだろうか。今回は、ドイツやフィンランドと同様、サワー種のライ麦パン（詳細な解説は展示場に譲る）を好むノルウェー人の国民食を紹介しよう。

ノルウェーの弁当「マットパッケ」

人口の約一四パーセントが移民のノルウェー。それが関係しているのかどうか定かではないが、食生活の多様化が進む。しかし、変わらぬ習慣もある。マットパッケだ。マットパッケは弁当のことで、老若男女問わず学校や職場に持参する。ただしメニニューは一択。北欧で一般的なオープンサンドのみである。作り方は簡単。ずっしりと重く大きなサワー種のライ麦パンをスライスする。ドイツの「バウアーブROOT」をひと回り小ぶりにした風体のパンが多い。片面にバターを塗り、ポーレグとよばれる具材を、日本の丼のように「のせる」。ポーレグは、ご飯のおともに通ずる。海産物をよく食べるノルウェーでは、スモークサーモンや、サバ缶（味噌煮ではなくトマト味）、タラコペーストなど、日本人なら白飯で、かき込みたくなる食材が、パンのおとも定番だ。

ポーレグについて書き始めると誌面が尽きるので話を戻そう。じつは、切る・塗る・

ム。夏休みの家族旅行中にもチーズのマットパッケを食べた」と話す。

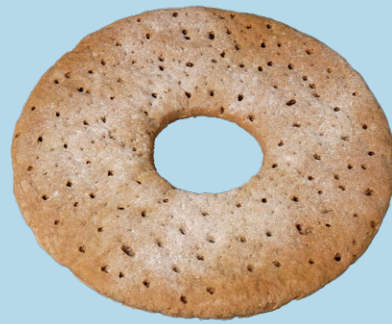
ブルーノストは、英語でブラウンチーズ。色合いから名前が付いた。厳密には、乳を発酵させず、チーズ製造の過程で出る副産物ホエイ（乳清）を煮詰めて作るため、チーズではない。ほんのり甘く、ねっとりとした食感が特徴だ。ホエイを廃棄せず再利用できるとあって、環境保護の観点から注目されている。



マットパッケの作り方。具材はレバーパテ、ブルーノスト、イエローチーズ。カウンター奥には専用紙とチーズスライサーが見える（撮影：オレ・クリスティアン・ストロム・シヴェルセン、ノルウェー、2023年）

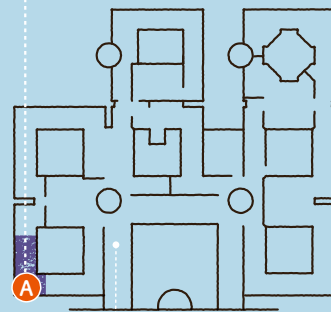


1946年ごろの学校給食を再現。クネツケブロとブルーノストのサンド。現在でも、朝食・昼食・おやつなどに重宝される（撮影：オレ・クリスティアン・ストロム・シヴェルセン、ノルウェー、2023年）



A レイカレイバの複製（フィンランド）

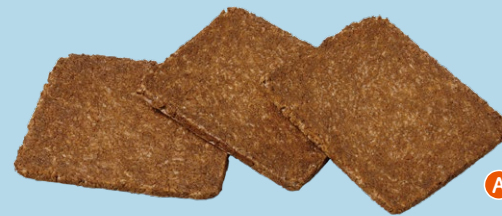
ヨーロッパ展示 「生業と一年」



観覧券売場
本館展示場



A バウアーブROOTの複製（ドイツ）



A プンパーニッケルの複製（ドイツ）

パンとチーズと。

みんぱく回遊

みやまえ ちさこ
宮前知佐子
民博助教

のせる、の三ステップで、マットパッケ作りは、ほぼ完了。次に、クッキングシートのような紙をサンドのあいだに挟み、サンドを重ねる。標準的なサイズに切った弁当専用紙も市販されている。最後に、大きめの紙で幾層かのサンドを包めば完成である。

エコなチーズ!? 「ブルーノスト」

マットパッケの頻出ポーレグは何といてもチーズだ。かたまりから、チーズスライサーで薄く削りだす。この道具こそ、ノルウェーの誇る偉大な発明品らしいので、いかにチーズとパンが生活に密着しているか見てとれよう。一九六〇年代、オスロ郊外で幼少期を過ごした男性は、「父も毎日チーズのマットパッケを携え仕事に行った。パンは必ず三枚で、毎日決まった手順で作られる。上段にはレバーパテなど柔らかなポーレグ、次にブルーノスト、下段は重量のあるチーズやハニエトスト、すなわち「ヤギのチーズ」とよばれ、山羊乳のみで作られていた。

パンがなければ「クネツケブロ」を

オスロでは学校給食が供された時期がある。第二次世界大戦終戦の翌一九四六年、一歳だった女性は、「給食はいつもクネツケブロとイエトストだった。でも、八〇歳を越えた今でも食べ飽きない」と言う。クネツケブロは、噛んだときのパキッというオノマトペ「クネツケ」を冠したパンだ。クラッカーのような見た目だが、他のパン同様、食事の際ポーレグとともに食べる。コンセプトはフィンランドの「レイカレイバ」と同じだ。軽量で長期間保存がきくので、ヴァイキング時代、航海中の主食に活躍したという逸話もある。低カロリーかつ栄養価が高く、現代ではダイエット中の若者にも人気だ。

パンが主食というわりに、パン屋の数が驚くほど少ないのは、クネツケブロが市民権を得ているためだと筆者は推測する。そう、「パンがなければクネツケブロを食べれば」よい。「なければ」ところが、積極的に。彼らいわく「まるでケーキ」の白パンは、健康に悪いとされ、食卓にはあまり上らない。一方、クネツケブロはどのキッチンにも常備されている。ノルウェーの食は、シンプルに見えて奥深い。そこには、たくさんの方の知恵とこだわり、文化が詰まっている。



夏休みの家族旅行中にマットパッケを広げたところ（撮影：ルットウ・タルティトゥ・シヴェルセン、ノルウェー、1961年）

みんなく インフォメーション

特別展

「交感する神と人 ヒンドゥー神像の世界」

会期 9月14日(木)～12月5日(火)
会場 特別展示館



パール・ゴーパール(幼子クリシュナ)
(撮影:増田大輔、撮影協力:株式会社エスバ)

◆関連イベント
研究公演
「バジャン」
—— 神々に捧げる信愛の詩^{うた} ——
日時 9月23日(土・祝)13時30分～
15時50分(13時開場)

『西アフリカのお話し』の 公演」

日時 9月18日(月・祝)11時30分～12
時13時30分、14時受付11時
会場 本館1階エントランスホール
(各回定員20名)

※申込不要、参加無料、随時受付

◆特別展関連ワークショップ

「はじめの二歩 やってみよう — ミラー刺繍」

日時 9月23日(土・祝)、30日(土)、
10月7日(土)、14日(土)、21日
(土)、28日(土)
13時～16時最終受付15時30分

会場 本館1階エントランスホール
(同時着席最大6名)

対象 6歳以上

※申込不要、参加無料、随時受付

「絵本の読み聞かせを楽しもう」

日時 9月24日(日)、10月15日(日)
11時30分～12時、13時～13時
30分、14時30分～15時(受付10
時30分)

会場 本館1階エントランスホール
(各回定員30名)

※申込不要、参加無料、随時受付

フォーラム型情報ミュージアム プロジェクト「タヘース」を公開

■「朝枝利男」コレクション
「タヘース」
https://fjm.
minpaku.ac.jp/
ased/
■「中国地域の文化」展示
「タヘース」
https://fjm.
minpaku.ac.jp/
chineseculture/



みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)
※定員400名
※事前申込制、先着順、参加無料
※当日参加受付あり(定員80名)

第537回
9月16日(土)13時30分～15時(13時開場)

ベトナムの黒タイの神話

講師 樫永真佐夫(本館 教授)

【申込期間】

■一般受付 9月13日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

第538回
10月21日(土)13時30分～15時(13時開場)

暮らしの中に現れる神がみ —— 現代ヒンドゥー教徒の生活の場から

講師 三尾稔(本館 教授)

多彩な像に現れるヒンドゥー教の神がみは、
願いをかなえる存在として人びととともに「生
きて」います。神像が生活の場で用いられる
姿を紹介し、現代ヒンドゥー教徒の暮らしや
世界観に迫ります。

【申込期間】

■友の会先行予約
9月11日(月)～15日(金)(定員80名)

【申込先】

国立民族学博物館友の会(千里文化財団)

■一般受付 9月19日(火)～10月18日(水)

みんなくウィークエンド・ サロン—— 研究者と話そう

会場 本館展示場(ナビひろば)
※定員なし(ご自由に参加いただけます)
※申込不要、要展示観覧券(イベント参加
費は不要)

9月10日(日)14時30分～15時15分
カナダ北西海岸先住民の
スクリーン版画の世界

話者 岸上伸啓(本館 教授)

10月1日(日)14時30分～15時

神になる人びと
—— 南インド・ケーララ州のテイヤム祭祀

話者 竹村嘉晃(平安女学院大学 准教授)
三尾稔(本館 教授)

10月8日(日)14時30分～15時15分

「交感する神と人」の「場」としての
寺院の様相

話者 永田郁(崇城大学 教授)
三尾稔(本館 教授)

10月15日(日)14時30分～15時30分

神がみを演じる
—— ネパールの仮面舞踏

話者 北田信(大阪大学 教授)
南真木人(本館 教授)

みんなく映画会 「ガンジスに還る」

聖地ワラーナシー(ヘナレス)で理想
の「死」を待つ男性とその家族が織り
なす人間ドラマを通じて、現代インド
の人びとの死生観に迫ります。

日時 11月3日(金・祝)

13時30分～16時(13時開場)

会場 みんなくインテリジェントホール
(講堂)(定員350名)

上映作品 Mukti Bhawan/Hotel
Salvation(2016年)

司会・解説 三尾稔(本館 教授)

参加費 要展示観覧券

(イベント参加費は不要)

※事前申込制(本人を含む2名まで)、
先着順

※事前申込の方へ、当日11時から本館
2階会場前にて展示観覧券を確認
後、入場整理券を配布します。

※受付期間中に定員に満たない場合
のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】

■友の会先行受付

9月25日(月)～29日(金)、定員80名

【申込先】

国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)

■一般受付 10月2日(月)～27日(金)

ワークショップ 「ヒンドゥー教の讃歌 「バジャン」を歌ってみよう」

日時 9月24日(日)14時～15時30分
(13時30分開場)

会場 みんなくインテリジェントホール
(講堂)(定員30名)

講師 ミーター・パンデイト(北イン
ド古典音楽声楽家、Soma
iya大学 教員)

虫賀幹華(京都大学白眉セン
ター 特定助教)

■一般受付 9月15日(金)まで
※友の会先行受付は終了しました。

ター 特定助教
林恰王(タプラー 奏者)

対象 高校生以上
※事前申込制(定員に達し次第受付終
了)、参加無料

日時 10月9日(月・祝)13時、
16時15分(12時30分開場)

会場 特別展示館地下休憩所(BF)
(定員15名)

講師 三尾稔(本館 教授)
永田郁(崇城大学 教授)

安森大樹(ル・テル学院高等学
校 非常勤講師)

対象 小学3年生以上

参加費 500円

持ち物 汚れてもよい服装、タオル

※事前申込制(9月6日(水)10時～定
員に達し次第受付終了)

【申込期間】

■一般受付 9月22日(金)まで
※友の会先行受付は終了しました。

【点字体験ワークショップ】

日時 9月9日(土)、10月14日(土)

12時～15時30分
(最終受付15時)

会場 本館1階エントランスホール

※申込不要、参加無料、随時受付

【描き書き@みんなく
世界の食へも】

日時 9月18日(月・祝)

10時30分～15時30分
(最終受付15時)

会場 本館1階エントランスホール

※申込不要、参加無料、随時受付

【点字体験ワークショップ】

日時 9月9日(土)、10月14日(土)

12時～15時30分
(最終受付15時)

会場 本館1階エントランスホール

※申込不要、参加無料、随時受付

第135回 9月17日(日)13時30分～15時

【特別展「交感する神と人 —— ヒンドゥー神像の世界」関連】

神になる人びと
—— 南インド・ケーララ州のテイヤム祭祀

講師 竹村嘉晃(平安女学院大学 准教授)

会場 モンベル渋谷店5階サロン

9月7日(木)～11月28日(火)

版画展 田主誠 Museum of Dreams —— みんなくと歩んだ版画家の創作世界

会場 本館1階エントランスホール
※観覧無料

友の会

お申込みは友の会ホームページ内の受付
フォームをご利用ください。

友の会講演会

参加形式
①本館第5セミナー室(定員90名)
②オンライン
友の会会員:無料
一般(会場参加のみ):500円

※事前申込制、先着順
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第540回 9月2日(土)13時30分～15時
パプアニューギニアの
貝と石のお金の話

講師 門馬一平(本館 特任助教)

第541回 10月7日(土)13時30分～15時

アート制作から見た北アメリカ北西 海岸先住民の社会・文化の変化

講師 岸上伸啓(本館 教授)

北アメリカ北西海岸地域に住む先住民の伝
統文化は、カナダ政府の同化政策によって
19世紀後半から急激に衰退しました。しかし、
1951年にポトラッチ儀礼の禁止が解除され
ると、先住民はトーテムポールやスクリーン
版画などの制作を通して文化復興運動を推
進しました。彼らのアート制作と社会・文化
変化の関係についてお話しします。

東京講演会

友の会会員:無料、一般:500円
※事前申込制、先着順(定員50名)
※オンライン配信はありません。

お問い合わせ

国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)

電話 06-6877-8893(9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp



あの絵画は誰の手へ

張詩雋

北京大学 PD 研究員



オークション会場に行ってみました

二部制のオークション

二〇二三年二月二日、芸術品の価値と価格に関心をもつわたしは、芸術品の競売の調査をするために北京の大



P社がオフィスをかまえるビル。国有企業であるP社は中国屈指の財閥に属しており、このビルには財閥傘下の他の企業もオフィスをかまえている(2022年)

手オークション会社P社の競売会場を訪れた。欧米ではクリスティーズとサザビーズが芸術品市場を牽引しているように、中国ではP社とG社が最大のシェアを占める。両社ともに二〇世紀末

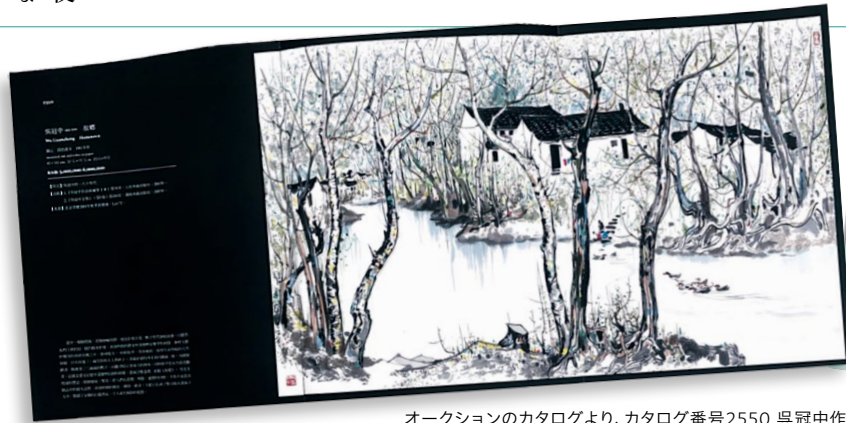
に設立され、中国絵画や書道、骨董品、モダンアート、ジュエリーや時計などのブランド品、茶や酒などの嗜好品、カードやポスターなどのコレクションといった幅広いジャンルを取り扱っている。

競売の前日と前々日に開かれる予展(下見展示会)で、中国人画家・呉冠中(一九一九―二〇一〇)の中国南方の水郷を表現した風景画《故郷》に一目惚れしたわたしは、その絵の落札が気になっ

「お宝」は夜に集まる

一方で夜七時ごろから開催される夜場は終了時間があえて設定されていない。「今宵は更けゆくまでゆつくりと銘品を吟味し、至上の価値あるものにしませう」というのが競売会社のポリシーであり、戦略でもある。競売人は丁寧に出品物のすばらしさを紹介する。それを聴きながらビッド(入札者)たちは、ときに迅速に、ときに控えめに

て夜場にやって来た。予展のうちに開催される拍賣(公開入札)は、昼間に開催される日場と夜に開催される夜場の二部制である。日場は朝九時半から一二時半、一三時半から一七時半までの二回にわかれていた。決められた時間内に大量の出品物を扱うため、競売のテンポが非常に速い。来場者の大半は美術品や骨董品を扱う業界関係者である。人数は多くない。



オークションのカタログより、カタログ番号2550 呉冠中作《故郷》(北京保利国際拍賣有限公司「北京保利拍賣2022年秋季拍賣會中国書画夜場」)



上:P社の予展、骨董品の展示会場。予展は開催時間が短いが一般公開となる。入札希望者に限らず、来場者はここで気になる出品物の状態を目の前で確認することができる(提供:趙胤軒、2023年)

下:P社の予展で出品物を確認する来場者(2023年)

《故郷》が映し出され、競売人は「次の作品は、カタログ番号二五五〇、呉冠中の作品《故郷》です。五〇〇万元から入札を開始いたします」と宣言した。すぐ何人かがパドルを上げた。「五〇〇万、いらつしゃいました!」と競売人は会場を見渡し、「前列の方です」と最初の入札者を認めた。直ちに隣の男性がパドルを上げ、「五一〇万、後ろの方です」と

いう間に八五〇万まで上がった。男性はあきらめた表情を見せパドルを膝に置き、入札をやめた。隣のわたしも少し負けた気分になった。結局《故郷》は二三五〇万元で電話参加者に落札され、真の買い手が誰かはわからないままだった。

会をとおして宣伝される。当日は入札者はもちろん、気になる出品物の行方を見届けようという観客も多く訪れる。冠中の作品が登場するこの日、会場は競売が始まる前にほぼ満席となった。六時四五分、夜場の競売人は上品なスーツを身にまとって会場に入ってきた。左手に設けられた電話参加担当席にいる同僚たちとあいさつを交わし、彼は会場奥の舞台に設置された演台の前に立った。競売人の隣には七人の若い女性が並んでいる。彼女たちは落札後、直ちに落札確認書を入札者まで届けに行く。

白熱する競り合い

七時、競売が始まった。今夜は絵画が出品される日だ。張大千や齊白石などの名作が次々と落札され、会場は次

第に熱を帯びていく。九時半ごろ、冠中の作品の登場だ。隣の席の六〇代の男性が、それまでずっと納めていたオレンジ色のパドル(番号札)を出して身構えた。P社のオークションは一定額の保証金を支払ってパドルをもらい、そのパドルを用いて入札(ビッド)するシステムである。男性が手にもつオレンジ色のパドルは一〇〇万元(二〇〇〇万円前後)の保証金のものである。「お目当ては冠中の作品ですね」「ええ」

先ほど少し雑談し、わたしは男性と仲良くなった。もし落札に成功したら、冠中の作品を見せてもらうという約束をした。わたしは味方になった気持ちで男性の落札を祈った。舞台の両側にある巨大スクリーンに

て夜場にやって来た。予展のうちに開催される拍賣(公開入札)は、昼間に開催される日場と夜に開催される夜場の二部制である。日場は朝九時半から一二時半、一三時半から一七時半までの二回にわかれていた。決められた時間内に大量の出品物を扱うため、競売のテンポが非常に速い。来場者の大半は美術品や骨董品を扱う業界関係者である。人数は多くない。

き、値段はあつと



別の日におこなわれた骨董品の夜場。壇上に立つのはオークションを進行する競売人である。夜場の出品物は注目度が高く、来場者のなかにはスマホで落札の瞬間を記録する人もいる。近年は会場外からスマホでライブ配信を見る人も(提供:趙胤軒、2023年)



木製容器を作る男性。木製容器は水や食料を運ぶための運搬具で、ゆりかごとしても使われていた。現在では土産品として販売されている(イマンバ、2016年)

一九八〇年代以降である。きっかけはアボリジニ・アート・クラフト社の「美術工芸品を購入しないか」という問い合わせであった。この連絡を受けた小山と松山は、オーストラリア先住民研究へと舵を切り、

一九八〇年代のタイムカプセル
オーストラリア先住民コレクションの内容は、じつに多種多様だ。その大半は、一九八〇年代前半、小山修三と松山利夫(ともに本館名誉教授)によって収集された。おもな収集地はオーストラリア北部と中央部である。これらは日本ではじめて本格的に収集されたオーストラリア先住民コレクションといつてよい。
一九七〇年代まで、日本におけるオーストラリア先住民に関する研究のほとんどが文献研究であった。言語学、教育学、地理学などの近隣領域の専門家による単発的な調査はあったものの、組織的な調査ではなく、日本語で書かれた文献も限られていた。体系だった調査が進められるようになったのは一九八〇年代以降である。きっかけはアボリジニ・アート・クラフト社の「美術工芸品を購入しないか」という問い合わせであった。この連絡を受けた小山と松山は、オーストラリア先住民研究へと舵を切り、

本プロジェクトでは、これらのコレクションの情報を追加、修正して、日本語から英語へと翻訳している。データベース作りは、地道な確認作業の連続で、文献やスクリーンとのにらめっこが続く。
だが、そのプロセスには壮大な物語の誕生を感じる瞬間もある。コレクションのなかには、



図録を眺める先住民女性(ユラーラ、2023年)

現地のアート・アドバイザーの協力を得て各地の物質文化を収集するようになった。
収集手法は、小山の専門である考古学に基づくもので、高額な作品から木製容器(クラーモン)の失敗作まで幅広く収集された。ときに小屋を棟丸ごと買い取ったり、アートセンターの仕入れ商品を二週間分すべて買い上げたりしたため、人類学者のハワード・モーフイはこれを「一九八〇年代のタイムカプセル」と表現している。しかし、コレクションにすべてのもが含まれているわけではない。オーストラリア先住民の物質文化のなかには儀礼に用いる神聖な道具もある。そこには限られた人物にしか継承されない伝統的知識がしるされているため、収集しないように細心の注意が払われた。
つなげる、つながる



木製容器の失敗作(H0101782)

わたしの調査地である中央砂漠で収集されたものも多数ある。二〇二三年三月、資料の写真が掲載されている、過去の展示図録を調査地に持参した。現地の人たちは図録をめくりながら、かつてのエピソードを次々と語ってくれた。「わたしたちの家族が作ったものが日本を訪れていたんだね。いつかわたしたちも日本に連れて行ってちょうだい」
そのことばに、時空をこえたつながりを予感する。物質文化は単なる静的な物体ではない。それらは忘れ去られた記憶とつながって新しい感情をうみだし、収蔵庫内に留まっていた資料に命をふきこむ。そして、これまで途絶えていた資料と現地の人びとの関係が再接続される。その作業は一筋縄ではいかないが、つなげる・つながることの喜びをかみしめながら、山あり谷ありのデータベース作りを満喫したい。無事に公開された暁には活用してもらえたら制作者として冥利に尽きる。

タイムカプセルを開く

——1980年代のオーストラリア先住民の暮らし

ひらの ちかこ
平野 智佳子 民博 助教

グローバル・ミュージアムを目指して

みんなく所蔵の標本資料へのアクセスについて、みなさんはご存じだろうか。みんなくに来館したことのある方なら、すぐに展示を思い浮かべるかもしれない。本館展示だけでもかなりのポリュウムなので、それもちろん正解である。

しかし、みんなくの資料全体で見れば、展示

場の資料はごく一部にすぎない。大半の資料は巨大な収蔵庫に保管されている。収蔵庫内の資料のことを知りたい場合は、データベース(標本資料目録、標本資料詳細情報)を活用するのがよいだろう。データベースにはみんなくのホームページからアクセスできる。日本語で情報収集するには大変便利だ。

ただし、わたしが長年調査してきたオーストラリア先住民の資料に関しては、データベース



アクリル絵画を描く女性(アリススプリングス、2023年)

オーストラリア先住民コレクション

資料点数：約3,700点
1980年代に収集された本コレクションには、先住民アートとして高い評価を得るようになった樹皮画やアクリル絵画などが含まれている。1980年代はこれらの作品に世間の注目が集まりはじめた時期であり、オーストラリア先住民の社会的な立場や視線が大きく変化していった時期の物質文化としても重要なコレクションである。

中央砂漠で収集されたトカゲの木彫(H0178077)



北部準州アーネムランド、エルコ島で使用された採集用のかご(H0114888)



遊牧の未来について

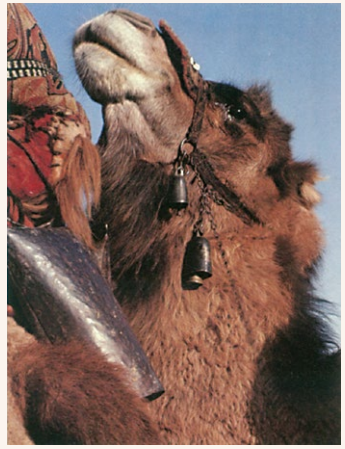
松原 正毅 まつばら まさたけ
民博 名誉教授

夏营地への移動にむけて

「最後の渡り鳥たち」(原題は Turna Misali 「ツルのような」)は、トルコ系遊牧民ユルツクの現状を淡々としたタッチで描いた作品である。ここでは、遊牧生活が過度なロマンチズムや過剰なペシミズムのもとに表現されていない。それによって、遊牧民ユルツクのおかれている困難な状況が直接的につたわってくる。

地中海沿岸のメルシン近郊の丘陵地帯を冬营地とするジェマルとギュルスン老夫婦の一家は、平穏な遊牧生活をいとなんでいる。平穩そうに見える遊牧生活の背後では、それ自体を切り崩しかねない変動の細波がうちよせる。変動をもたらす波のひとつは、地方政府からの定住への「圧力」である。地方政府は、コンクリート製の定住住居の斡旋や放牧地と移動路の制限を明言してくる。

変動をもたらすもうひとつの波は、家族内部の変化である。ジェマルは、加齢



ユズ・チャヤ(顔面につける鈴)をつけたラクダ(トルコ、1979年)

からくる足の痛みをかかえている。妻ギュルスンの処方する生薬も、痛みをやわらげてくれない。最終的に、ジェマルはチャドル(テント)生活をあとに単身で固定住居での居住を選択する。ヤギの群れの放牧を担っていた次男ヌレットインは、ジャンダルマ(憲兵)によって徴兵のため強制的につれさらされる。長男ムスタファは、大型トラクターに魅了される。購入を熱望するムスタファに、銀行は不動産の提示と保証をもとめる。遊牧民であるムスタファには提示すべき不動産はなく、所有するヤギの群れの一部を売却して購入資金にあてようとする。ムスタファには、ヤギの群れをトラクターの荷台に積んで移動するかんがえもあった。これらの一連の変動は、夏营地への移動の直前におこっている。

ギュルスンは、ムスタファの提案を決定然としりぞける。ムスタファのさしだし

「最後の渡り鳥たち」

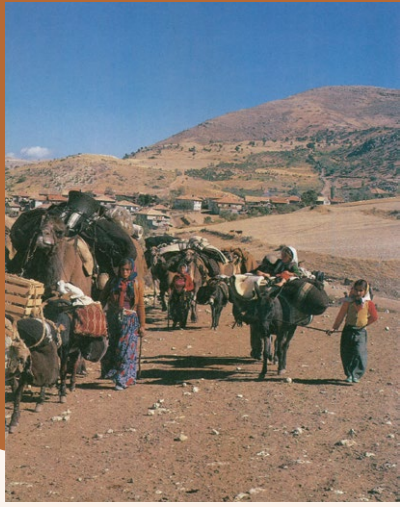
原題：Turna Misali
2021年/トルコ/トルコ語/99分/DVDなし
監督：イフェト・エレン・ダヌシュマン・ボズ
出演：シェンナル・ノガイラル、ネジメティン・チョパンオウル、ティムル・オルケバシホカ
2023年9月30日(土)のみんぱく映画会にて上映予定(詳しくは12頁をご覧ください)



映画「最後の渡り鳥たち」より ©IEDB Film



1980年6月夏营地へむかうラクダの隊列。クルク・ゲチディにはいつてすぐの峠をくだる(トルコ、1980年)



上：スバシの露营地におけるチャドル(トルコ、1979年)
下：炎天下をゆく移動集団。背後に通過した村がみえる(トルコ、1979年)

た札束を投げかえす。ギュルスンはチャドルをたたみ、孫娘エリフたちとラクダの隊列をひきいてヤギの群れを追いながら夏营地への移動を開始した。ムスタファと妻ルキエ、ロバの背に乗せた幼い息子も、あとを追わざるをえなかった。

四〇年の歳月の流れ

わたし自身がチョシル・ユルツクたちのなかで起居をともしたのは、一九七九年から一九八〇年にかけての約一年間であった。「最後の渡り鳥たち」の映画製作は、この四〇年後におこなわれた。四〇年の歳月の流れのあいだにおきたトルコの社会政治的な変化は、おおきい。都市部には当時すくなかった高層建築が林立するようになり、村落部の様相も一変した。一九二三年のトルコ建国時から渴望されてきた水道・道路・電気の村落部における整備が、一九八〇年代以降に急速に展開したからだ。

遊牧生活にも、幾分の変化がみられる。もつともおおきな変化は、夏营地や冬营地などをむすぶ移動の形態におこった。四〇年前においてもすでに少数事例となっていたラクダの隊列をつらねた移動の形態は、現在ではさらに減少している。移動路ぞいの村々の畑に家畜群がはいることよっておこるトラブルを避けるた

め、トラクターやトラクターなどに家畜群をつみこんで一気に移動をすませる事例が増加しているからだ。

遊牧生活そのものが、畜産という巨大な経済的網目のなかにくみこまれたこと

によっておこった変化もある。そこでは、経済的な合理性や功利性がひたすら重視される。そのため、遊牧生活自体をやめるか畜産に軸足をのいた牧畜生活に移行する事例が増加した。

映画の主人公ギュルスンは、敢然と遊牧生活の継続を選択した。この選択の背景には、数万年におよぶ遊牧の起源にまつわる厚い歴史とのかかわりが存在する。五万年前ころにアフリカから西アジアに移動した現生人類は、はじめてこの地で野生のヒツジやヤギの群れに遭遇する。遭遇から年月をへるなかで、現生人類の集団の一部は野生動物群との共生関係の構築をおこなうようになった。この歴史が、遊牧の起源につながってゆく。現在の遊牧生活においても、共生関係の構築の水脈の持続性を実感できる。ギュルスンは、この水脈の持続性をえらんだわけだ。これは、経済的な合理性や功利性をこえたものである。

遊牧の未来は、家畜群との共生関係の構築への人類史的な評価のしかたにかかわっている。

うまさは同じ？ 臓物からナッツまで

くどう
工藤 さくら
民博 外来研究員

2016年12月の昼下がり、わたしはネパール、カトマンドゥにあるネワール族の知人宅の屋上で、宴会料理に使われる水牛の臓物をきれいにする仕事を手伝っていた。大きなタライに入れられた腸や胃袋、レバーなどを清浄な水で、ていねいに洗っていく。周りには仕事に駆り出された人が何人もおり、淡々と作業をしている。退屈をもて余した兄貴分が話しかける。

「お前マクセ ツォンってことば知ってるか？」

わたしはこのことばを知らなかったが、説明によると、肉の軟骨部分や内臓のゼリーやゴムに似た食感を伴うおいしさを形容することばだという。日本語の訳語を与えるならば「臓物うまい」といったところか。聞くと、このことばは現在ほとんど使われなくなっており、意味を知る若者も少ないという。

しかし辞書を開いたわたしは混乱した。マクとは、アーモンドのようなおいしさや香ばしさ、牛乳やヨーグルト、ダル（豆）スープなどの風味の良さをあらわす形容詞で「こく」や「うまみ」などの意味に近いようだ。臓物からナッツの味わいまでを含むとは驚きだ。通常は状態を示す動詞とともに「マクセ ツォン（おいしい）」というふうに使われる。しかし現在ではおいしいを意味する表現は「サー」という名詞にほぼ取って代わられている。『なくなりそうな世界のことば』（吉岡 乾 著、西淑 イラスト、2017年）にもマクは取り上げられ、すでにことばの意味は失われつつあるとあっていい。

ネワール語はチベット・ビルマ語派に分類され、共通語のネパール語とはまったく異なる言

語形態をもつ。話者は減少の一途をたどり、移住等による減少のみならず、同居家族に話者がいても学校など外では英語やネパール語を使う機会が多くなり話せなくなっている子どもも多い。タトゥーやTシャツなどのデザインとして旧式文字が嗜好しこうされる一方で、言語文化の継承が危ぶまれており、近年ではネワール語教育を目的とした学校も創設されている。

2022年に再訪したときのこと。別の友人が最近話題のおしゃれな菓子店で誕生日ケーキを注文したというので、店の名前を聞いてみたところ「マクセ」だという。友人はちょっと面白いけど「おいしい」という意味だから大丈夫だと言った。いや、もしかするとこのことばは文脈や使う人の性別によって変幻自在な意味をもつかもしれない。「こくやうまみのあるおいしさ」をあらわすマクが、さまざまなおいしい場面で姿を変えながらリバイバルされつつある。



ミルクキャラメルの入ったお菓子の箱。マクセの説明には「ただほっぺが落ちるほどおいしい」と書かれてある

『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893 (平日9:00~17:00)
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく 2023年9月号

第47巻第9号通巻第552号 2023年9月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
編集委員 樫永真佐夫(編集長) 河西瑛里子
黒田賢治 島村一平 中川理 松本雄一
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団
印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係をお願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



月刊みんぱく

2023年
9月号

編集後記

ウルトラマンしかり、仮面ライダーしかり、日本の特撮ヒーローたちはふだんぶつうの市民。変身してはじめて異次元の強さを発揮できる。いっぽうアメリカでは事情が異なる。スーパーマンは変身、といっても仕事用コスチュームに猛スピードで着替えるだけで素顔はさらしたまま。それが子どものころから不思議だった。だが、^{やぶうちきと}藪内斗司さんの「マスク考」を読んで納得した。あの日本の変身は、能面をかぶって神靈^{へんげい}に変化する意味なのだ。

日本人のマスク着用についても藪内さんは触れている。そういえば、コロナ禍で3年ぐらい、その防疫上の効果よりも接触回避のエチケットとしてマスク着用が事実上義務化していた。これは慣習として、部分的に残っている。鼻と口をマスクで覆い、両耳はイヤホンで塞ぎ、まるで邪視封じのようにスマホ画面に注視して可能な限り外界はシカトしようとする人だって、今なおめざらしくはない。顔中の穴という穴を遮蔽するこの変身に、戦うヒーローの趣はない。もっばら守りの態勢だ。生きることはせめたてられること、というほどまで救いがなく、ということか。

いや、きっとそうだ。インドだって神さま絵だらけなのだから……。みなさん、ぜひホンモノの神さま絵たちに会いにお越しください。(樫永真佐夫)



次号の予告 10月号

特集「カナダ北西海岸先住民のアート、最前線」(仮)

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

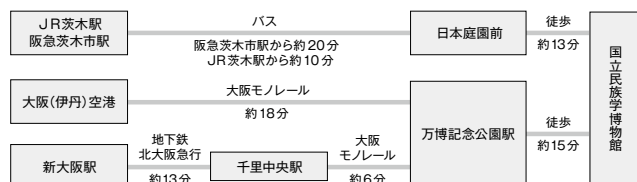
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は翌日が休館日)
年末年始(12月28日~1月4日)



主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>



日本万国博覧会記念公園シンポジウム 2023

「日本人」の内と外

——異文化接触を語り合う

1970年大阪万博は、多くの日本人が自国以外の異文化に大規模に接触する大事件となりました。それから約50年、われわれ日本人はどのように異文化を受容し、あるいは自国の文化を海外に向けて発信してきたのでしょうか。2025年大阪・関西万博の開催を控えたいま、本シンポジウムでは、1970年大阪万博およびそれ以後の50年間で日本における異文化接触とその受容のあり方を検証し、日本人にとっての「内」と「外」の認識をあらためてふりかえるとともに、これからの時代に求められる私たちの世界とのかかわり方について考えます。

プログラム

挨拶 中牧 弘允 千里文化財団理事長

シンポジウムの開催にあたって 吉田憲司 国立民族学博物館長

講演1 「大阪と博覧会イメージ

——成功体験はくり返すか、第5回国内勧業博からEXPO'70へ」 橋爪 節也 大阪大学名誉教授

講演2 「京都と万国博覧会」 井上 章一 国際日本文化研究センター所長

講演3 「万博でアフリカから何が学べるのか？」 ウスビ・サコ 京都精華大学全学研究機構構長

パネルディスカッション



2023年 **10月28日** (土) 13:30-16:30 (開場13:00)

会場 国立民族学博物館
みんぱくインテリジェントホール(講堂)
定員 350名(要事前申込・先着順) 参加費 無料

■会場参加……要事前申込・先着順 ■オンライン(ライブ配信)……予約不要(当日、千里文化財団WEBサイトのイベント詳細ページより無料でご視聴いただけます。)
【イベント詳細・受付フォーム】https://www.senri-f.or.jp/expo_symposium2023/ 【申込受付期間】2023年9月4日(月)～10月20日(金)
【お問い合わせ】万博記念公園シンポジウム2023事務局(千里文化財団) TEL: 06-6877-8893(土日祝日を除く9:00～17:00)



主催：公益財団法人千里文化財団 共催：大阪府、国立民族学博物館 協力：国立大学法人大阪大学、公益財団法人大阪日本民芸館、大阪モノレール株式会社、公益財団法人関西・大阪21世紀協会、万博記念公園マネジメント・パートナーズ 後援：公益社団法人2025年日本国際博覧会協会、吹田市、NHK大阪放送局



国立民族学博物館 特別展図録

2023年9月14日発売新刊

『交感する神と人——ヒンドゥー神像の世界』

さまざまなモノに現れるヒンドゥー教の神がみの姿や、神と人との交流のありさまを多角的に紹介し、人びとが神がみにささげる愛や願いのかたちに迫る。ヒンドゥー教のなりたちの概説や、ヒンドゥー神像にまつわる特別展実行委員の書き下ろしエッセイ13編も収録。ヒンドゥー教の神がみの世界へいざなう一冊。

編者：三尾 稔

発行：国立民族学博物館

本文200頁 B5変形

ISBN: 978-4-910055-10-7

定価 **2,750円**(税込)

表紙：

パール・ゴーパール(幼子クリシュナ)

特別展

交感する神と人

——ヒンドゥー神像の世界

会期：2023年9月14日(木)～12月5日(火)

場所：国立民族学博物館 特別展示館

お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ E-mail shop@senri-f.or.jp 水曜日定休
オンラインショップ「World Wide Bazaar」<https://www.senri-f.or.jp/shop/>



オンラインショップ

2023年7月1日から、オンラインショップでAmazon Pay(アマゾンペイ)が使えるようになりました。

ただし、国立民族学博物館友の会会員の方の会員割引につきましては、Amazon Pay をご利用の場合は適用できませんので、あらかじめご了承ください。友の会会員割引の適用を希望の場合は、会員番号をお知らせいただくとともに、お支払い方法を郵便振替・銀行振込を選択ください。